

NHK大河ドラマ「軍師 官兵衛」Ⅲ 黒田長政の左手

二度にわたる朝鮮出兵（文禄・慶長の役〔一五九二～九八〕）は慶長三年（一五九八）八月十八日の豊臣秀吉の死によって終わりました。秀吉は享年六十三歳、後継ぎの秀頼は六歳でした。直ちに朝鮮在陣の諸將に撤退が命じられます。十数万の日本兵が朝鮮に取り残される恐れがあったからです。

翌慶長四年になると大阪城の豊臣秀頼を守る豊臣方の武將（石田三成ら五奉行）と家康との間が険悪になります。五奉行が伏見の家康を討つという噂が流れ、長政が家康守衛にかけつけたことがありました。この時、家康は長政の手をとって感謝したという事です。

でほしいと頼まれました。その古文書は驚くべき内容を含んでいました。仮に「神吉家覚書」と題しておきましょう。神吉という名前は、地域の有力者として明治初期にもよく目にします。

その史料によると、神吉家は黒田家と同じ播磨国（兵庫県）の出身でした。神吉兵蔵が官兵衛に見出され、官兵衛、長政の二代にわたって身近に接したということ。

その子、小助と三八は関ヶ原に従軍しました。ここでは三八の行動に注目します。

一、三八 兄弟一同二関ヶ原御陣御供仕候。御陣中働申候段、御感被遊候由。尤筑前中納言殿御身方御内通之砌、大久保伊之助・神吉三八兩人被三召出、今度御大切之御使二付、其方共兩人二被二仰付一候間、忠勤可仕旨、御直二被二仰付一、御用無滞相勤、御本陣え罷帰候由。

筑前中納言とは名島に在城していた小早川秀秋（秀吉の甥でその養子となり、後に小早川隆景の養子）のことです。三八は秀秋が「内通」した時（西軍から東軍に裏切ること）、長政によって大久保伊之助と共に呼び出され、小早川の陣所に使いに行つたというのです。まさしく「御大切之御使」で、長政の小早川家切り崩し作戦の一翼を担っていたのです。

貝原益軒『黒田家譜』には家康が長政の手をとったことが三度あったと書かれています。二度目はその直後のことで、家康が藤堂高虎邸に滞在中、警護に当たったときでした。

そして三度目が、慶長五年九月十五日、関ヶ原の戦いでのことです。会津の上杉景勝（謙信の養子）は石田三成と謀って家康を挑発します。このため家康が会津討伐に向かい、その隙に三成が挙兵し、景勝・三成が家康をはさみ討ちにする形になりました。家康は江戸から小山（栃木県）に至ったところで諸將と相談し、三成と戦うために兵を返します。こうして東西両軍が関ヶ原で激突する「天下分け目の

再び貝原益軒『黒田家譜』によると、敵方は「大軍にて要害よき所に陣取」つている、味方に不利だ、と長政は考えます。そして誰かを裏切らせようと考えのですが（益軒は「反忠」と書いています）、この時、秀秋を標的に選びます。秀秋の家老平岡石見という人物は、長政の母の姉（つまり長政の伯母）の子・黒田二郎兵衛の姉（長政の母の姪）長政の従姉妹）にあたる人を妻にしています（益軒は長政の母の「姪婚」と言っています）。しかも黒田家の重臣の弟が黒田家を離れて小早川家に仕えていました。秀秋に働きかけずとも、平岡らのゆかりをたどってひそかに条件を詰めることはできたわけです。

長政は大久保と神吉を使いとして平岡石見に手紙を持たせました。益軒はその内容を詳しく書いているので、何か記録が残っていたのでしょう。

この手紙は途中で敵に奪われてはならないので、細く切り分けて、一二三……という順番を書き、それをこよりにして笠の緒とし、先方についてこよりをほどこいて番号を復元し、手紙として読めるようにしたという、念の入ったものでした。

内通の約束をとりつけると、互いに人質を取り交わしました。このとき大久保伊之助は人質として松尾山にとどまりました。内通の約束を伝えたのは神吉三八だけだったようです。秀秋は松尾山から駆け下りて大谷刑部の陣に攻め込み、これをきっかけに

戦い」が開始されました。

長政は六月六日、家康の養女（実は保科正直の娘）を嫁として迎えていたので、当然ながら家康の側に属していました。正直の妻は家康の異父妹（家康の生母が久松家に再嫁してできた子）なので、長政の妻は家康の実の姪にあたります。

関ヶ原には両軍合わせて十数万の兵が布陣しました（もちろん正確な人数はわかりません）。戦略的には迎え撃つ西軍が優位を言われていたと言われますが、わずか一日で東軍の勝利に決まりました。松尾山に陣をとった西軍の小早川秀秋が裏切ったからです。町内のある方から親族の家に伝わる古文書を読ん

小西行長、宇喜多秀家も敗れていきました。石田三成も敗走し、後に捕らわれます。家康の勝利と決し、家康は長政の側に近づきます。

「今日の合戦勝利を得し事、ひとえに貴方かねての計策ゆえなり。……代々黒田の家に対し疎略あるまじきよし仰せられ、諸人の見るところにて、長政の手をお取りいただきましたまう」（『黒田家譜』）

これが長政の手をとった三度目です。長政は中津に帰り、父官兵衛に報告します。すると、父は不思議なことを聞きます。

「家康公はおまえの右手を握ったのか、左手を握ったのか」

「右手です」

「その時、おまえの左手は何をしていたのか」

父はその時、目の前の家康をなぜ殺さなかったのか、と聞いたのです。左手で剣を取ればよかったのに、というわけです。もちろんその場で長政は殺されます。官兵衛にすると、それでも天下が転がってくるかもしれない、せつかくのチャンスだったのです。

長政は家康に誉められたことで満足し、官兵衛は家康から天下を奪おうとしたという、親子の資質の違いを表すエピソードとされます。ただし真偽は不明です。